33　久方の　光のどけき　春の日に　静心なく　花の散るらむ　　紀友則



桜の花びら

〈声に出してよんでみよう〉

ヒサカタノ　ヒカリノドケキ　ハルノヒニ

シズゴコロナク　ハナノチルラン

＊「づ」は、「ズ」とよみます。「ジ」と「ヂ」、「ズ」と「ヅ」は、以前は違う発音だったのですが、16世紀頃から混同されるようになり、現在では高知や九州南部などの方言を除いて、違いはほとんどなくなっています。[1]

＊「む」は、「ン」とよみます。古くは、撥音の「ン」にあたるかなはなく（五十音図やいろは歌[2]にも「ん」の文字はありませんね）、「む」で代用したり、表記しなかったりしていました。

〈どんな意味だろう〉

日の光がのどかな春の日だ。

それなのに、なぜこんなにあわただしく、桜の花は散っているのだろう。

（こんなに急いで散らないでほしいなあ。美しい桜の花を、もっと見ていたいなあ。）

＊「久方の」は、「天」「日」「月」「光」「雲」などの**枕詞**です。枕詞とは、和歌の修辞技法の１つで、ある言葉の前に付ける飾りのような、通常５音の言葉です。枕詞の意味や効果は、現代ではだいぶ分からなくなっているのですが、言葉というものの持つ魔力や呪術性に関連があるのではないかと言われています。[3]

＊「らむ」は、現在推量を表します。①目の前にない現在の様子を、「今ごろ･･･し

ているだろう」と推量したり、②目の前の現在の様子について「なぜ･･･しているのだろう」と原因・理由を推量したりします。ここでは、②の意味です。

〈解説〉

お花見・桜前線・桜吹雪・桜餅・・・

今も昔も、日本人は桜が大好きで、桜をテーマにした和歌もたくさん作られてきました。中でも、この歌は有名です。桜は、咲いて間もなく散り始めます。そのはかなさ・潔さが、日本人の心性にマッチしたのだと言われています。

在原業平（→「17 ちはやぶる」）の次の歌も桜を詠んだものとして有名です。

世の中に　絶えて桜の　なかりせば　春の心は　のどけからまし

意味は、「この世の中に、もし全く桜がなかったら、春の心はのどかだろうなあ。（しかし、現実には桜があるから、いつ咲くかと気をもんだり、散るのを惜しんだりしてこんなに心が乱れるのだ）」というものです。

日本でこんなに桜が愛されるようになったのは、9世紀頃からと言われています。[4]

〈作者と出典〉

この歌の作者の**紀友則**（？―907）は、**紀貫之**（→「35 人はいさ」）のいとこです。貫之と友則はともに、最初の**勅撰和歌集**である**『古今和歌集』**（905年頃成立）の撰者です。[5]　勅撰和歌集とは、天皇の命令によって編集された歌集という意味で、この中に歌が選ばれることは歌人にとって大きな名誉でした。友則のこの「33 久方の」の歌も、『古今和歌集』の中の1首です。

[1] 「じ」は [ʒi]、「ず」は [zu] と発音します。これらは、現代も同じです。発音が変化したのは「ぢ」「づ」です。これらは、８世紀頃には [di]、[du] という発音だったのですが、16世紀頃から、[dʒi]、[dzu] と発音されるようになり、やがて、[ʒi]、[zu] に変わっていった、と考えられています。この発音の変化は、「ち」「つ」の発音が [ti]、[tu] から [tʃi]、[tsu] に変化したのと並行するものですが、なぜこれらの変化が生じたのかはよく分かっていません。

[2] 「いろは歌」は、10世紀末から11世紀頃成立したと考えられているもので、当時使われていた かな 47文字を１度ずつ使って作られた、次のような歌です。

いろはにほへと　ちりぬるを　わかよたれそ　つねならむ

うゐのおくやま　けふこえて　あさきゆめみし　ゑひもせす

現代では使われていない かな がありますね。「ゐ」はワ行イ段、「ゑ」はワ行エ段の音で、現代ではそれぞれ「イ」「エ」と読みます。また、当時は、清音と濁音の区別は表記上はありませんでした。濁点や漢字をあてはめて意味を示すと、次のようになります。

色は匂へど　散りぬるを　我が世誰ぞ　常ならむ

有為の奥山　今日越えて　浅き夢見じ　酔ひもせず

また、発音は次の通りです。

イロワニオエド　チリヌルオ　ワガヨタレゾ　ツネナラン

ウイノオクヤマ　キョーコエテ　アサキユメミジ　エイモセズ

内容は、仏教の経典から採られたものと言われ、現代語では大体次のようになります。

花の色は美しく輝いているが　花は散ってしまうのに

この世で一体何者が　常に変わらずにいられるだろうか（すべては無常である）

いろいろの因縁により生じるこの世を　今日生きて（しかしいつかは死んでゆく）

浅い夢を見たりはするまい　幻のようなこの世に酔ったりはしない

但し、ここで示した以上の解釈には、異説もあります。

[3] 言葉の持つ不思議な力を、「**言霊（ことだま）**」と言います。

[4] ８世紀以前は、中国伝来の梅の花が人気を集めていました。

[5] 『古今和歌集』の撰者には他に、凡河内躬恒（→「29 心あてに」）、壬生忠岑（→「30有明の」）がいます。